

胡淑雯著 三須祐介訳

太陽の血は黒い

あるむ／2015年4月／464頁／2500円＋税



橋本恭子

『太陽の血は黒い』（原題…太陽の血は黒的、印刻出版、二〇一一年）は、台湾の女性作家胡淑雯にとって二冊目の単行本とのことだが、最初の『哀艶は同年』（印刻出版、二〇〇六年）が一二篇よりなる短編小説集であるのに対し、その五年後に出た本書は、翻訳で四五〇頁にもなる堂々とした長編小説である。全一九章からなる物語は各章の出来にむらがあり、いかにも作家としてのキャリア途上にある作品という印象を免れないが、時に筆をコントロールできないほどの、どうしても語りたいたいという強い思いが溢れ、読む者を圧倒する。未熟さの残るこの大作は、むしろその未熟さのゆえに魅力的なかもしれない。

ただ、執筆当時の作者の思いのありつたけを、あれもこれも詰め込んだようなこの小説に、直線的に流れる時間はわずか十日間である。物語の語り手であり、主人公でもある「わたし」は、台湾大学哲学研究科修士課程の大学院生で二十四歳の李文心。その彼女がある日の午後、父親から理不尽に罵られて家を出、同級

生・小海（陳海旭）の住む高級マンションに転がり込み、そこで数日を過ごした後、結局、両親のもとに戻ろうとするまでの日々だ。それは、二〇一〇年の異常に寒い四月のことで、清明節を間に挟んだ時期である。だが、そこに文心自身や、両親、外祖父・外祖母、さらに友人たちの記憶や過去の物語が、一九の章に分けて挿入され、交錯し、リズムのよいうに広がっていく。同時に、現在進行形で語られる部分が横糸として、バラバラなエピソードを繋げていく。文心と小海の間には性的関係が生じてそれまでの友人関係が危うくなり、二カ月前に自殺未遂をはかって台湾大学病院に入院中のレズビアン友人・阿莫は退院できるまでに回復し、文心と父は和解する。だが、母・阿雪は清明節に文心を伴って自分の母親の墓参りに行った後、突然、亡き母に憑依されたように精神に異常をきたしてしまふ。文心自身も精神科医に治療が必要だと言われるまで追い込まれていくが、彼女はかろうじて持ちこたえ、新しく生き直し、小説を書くこうとするところ

で、物語は終わる。

この李文心が通過したわずか十日間の直線的な時の流れは、様々な人物の入り組んだ記憶の断片が重層する霧のような厚みに隠れて、実はよく見えない。長くもあり、短くもあるような時間だが、自分の記憶だけでなく、他者の記憶や物語をも含めた、濃密な時間をかいくぐった彼女は、最終章でそれまでとは違う「まったく新しい人間」になる。だが、彼女の新生は、いったい誰の、どのような、記憶をかいくぐることによって、もたらされたのだろうか。

それを理解するには、作者自らが記した「日本語版序」が参考になるかもしれない。それによると、この作品を通じて表現したかったのは、政治犯や精神病者、幼少期の性的被害者、性転換したいかあるいはすでに性転換した人の、深い孤独のうちにある語ることの困難や記憶の不安定感、であるという。政治犯とは文心の外祖父のことで、幼少期の性的被害者は文心自身のほか、友人の阿莫や母・阿雪も含まれる。性的マイノリティ

については、阿莫はもちろん、文心がアルバイトで書いているラジオの台本のモデル・路路や台北の街角で出会った人々などが含まれる。口はあつても語れない「貧者」とされる彼ら・彼女らの中には、さらに、学歴のない文心の父親や、突然、夫を国家反逆罪で奪われた外祖母も含まれるだろう。作者はこうした「貧しき人々の歳月」を見つめ直し、文心の眼差しをとおして描いていく。その眼差しはどこまでもやさしく、彼女に性的な危害を加えようとした、遠い記憶の中の知的障がい者の少年・小光に対しても、同様である。本書の訳者三須祐介氏も「訳者あとがき」に、「李文心のまなざしは、「いびつな」弱者を見捨てないあたかなやさしさも湛えているのである」と記しているが、それは、作者胡淑斐のやさしさでもあろう。ただしそれは、作者本来のやさしさというより、むしろ、自他の重層的な記憶に丁寧に向き合おうとする李文心の十日間を描く過程で徐々に見出されたやさしさのように思われる。それは、弱者が身に受けた痛みの物

語に耳を傾けながら、同時に傷の原因となつた加害者を許すことをも学び、そうしてようやく救済された魂から生まれたやさしさであり、さらに、人は簡単に他者を傷つける側にも立つてしまう、という悲しさを知ることから生まれるやさしさでもある。以下では、その点を文心と小海の物語に即して見ていきたい。

先ほど、社会的弱者に対する文心の眼差しはやさしいと書いたが、だからこそ反対に、弱者を抑圧しようとする巨大な権力に対し、彼女の眼差しは極めて厳しくなる。例えば、国民党の高官であつた小海の祖父・海爺爺に対し、文心は傲慢ともいえるような眼差しを向けるのである。

わたしは海爺爺の背後に、醜惡このうえない歴史を嗅ぎ分けることができただ。おそらくだからこそ、自分が彼らより下にいるなどと思つたこともない。(一九八頁)

第三章「葉蒂(ローデイ)」でグロテスクなエピソードとともに紹介されるこの

老人は、文心と小海の関係にも歪んだ影を落とす。文心は小海に対しても牙をむくが、彼女の口からほとぼしる言葉の激しさは、単に彼と性的関係を持つてしまったことに起因するのではなく、むしろ、小海が海爺爺の血縁であることによる。

ただ、文心の小海に対する心情の変化は、言葉が足りず、あいまいで、とても成功しているとは言いがたい。順を追つて見てみると、文心は、家を飛び出してすぐ小海のところへ転がり込むが、その晩、小海のマスターベーションを見てしまう。翌日は、それを手伝い、三日目にも、小海から手伝つてくれといわれるが、断る。ところが、四日目には彼とベッドをとともにする。それは、「わがままと好奇心によるもの」であり、友情の境界を知りたかつたからだ。「結果はなかなか悪くなかつた。わたしは自分と小海を誇りに思う」と、文心は言う。「一夜の甘い痙攣」は、互いの関係を損なわなかつたのである。二人は翌日もベッドをとともにするが、そのとき、それぞれが

言葉にできない「秘密」を抱えているところが暗示される。ところが、その後、小海が三晩連続で文心が寝ている部屋をノックしたという理由で、文心は小海のマンションを出ることを決意する。「身体で家賃を払っているようだし、居候の身という立場の弱さもある」とはいうものの、この変化は唐突だ。というのは、夜だけでなく、昼間も、二人の関係は決して悪くなかつたのであり、阿莫も誘つて三人一緒に『欲望という名の電車』の映画を見たり、戯曲を読んだりしているのである。

それでも、小海のところを出るという文心の決意は変わらず、それを受け入れられない小海は、文心が出ていこうとするとき、「秘密」を持ち出す。文心は、それが外祖父に関することだと思ふ。実は、彼女の外祖父が政治犯として捕まり、一六年の間、緑島に送られていた案件に、海爺爺が関わっていたのだ。だが、二人とも早くからそのことを知っていないが、口には出さなかつたのである。ところが、このときになって、文心

は次のように言う。

「でもあなたのことを恨んでもいいし、嫌いなわけでもない。あなたのことは大好きだし、わたしのいちばんの親友だよ。だけど、あなたやあなたの家族が象徴しているようなものを、わたしが軽蔑してゐることは、認めなければならぬ」(三五八頁)

彼女にとつて小海の家族は、友情や愛情では決して乗り越えられない「軽蔑」の対象であつた。だが、外省人第三世代、それも「青い血液」「青は国民党を象徴する色」が流れる特権階級のハンサムボーイである小海にとつて、これはあまりに残酷なひとことだつたのではないだろうか。たとえ、文心の家族にしてみたら、このひとことを発せるようになるまでに、半世紀の時間を必要としたのであつたとしても、これはおそらく、文心の両親の世代にはとても口に出せるようなセリフではなかつただろう。だが、時は流れ、世の中は変わり、世代は交代していた。小海はそれゆえ、次のように答

えるのが精一杯だつたのである。

小海は頷いて言つた。「僕もそうだよ」(三五八頁)

一方、小海が文心に隠していた秘密とは、そのことではない。彼もそのことは知つていたが、言いたかつたのは、別のことであつた。それは文心に向けて、「きみを愛してゐるんだ」というひとことだつたのである。だが、彼女はそれをはねつける。それも、冷酷な言葉で。小海が「愛してゐるんだ」というのは、文心の家族に対する罪悪感からくる思い込みだというのである。

「(……) もうひとつは、あなたたちのような特権家庭の幸福で豊かな暮らしは、わたしたちのような家庭の悲劇の上に成り立っている」とあなたが気づいたからだよ……だから、あなたは「性」によつて混乱しちやつただけじゃなく、「罪悪感」によつて有頂天になつてゐるってことだよ」わたしは言つた。(三六一二頁)

「弱者」に対してやさしいはずの文心が放つ毒矢のようなひとことに、読者はたじろぐだろう。そしてこの瞬間に、本土化のプロセスの中で、かつての支配者／被支配者の立場が逆転したことを知るだろう。それまで固定化されてきた社会構造にひびが入つたのである。

私はこの小説を読んでいる間中、エルネスト・ルナンの講演原稿「国民とは何か」がしきりに思い出されて仕方なかつたのだが、ルナンによると「国民」を創造する本質的な因子は「忘却」であるという。どのような政治構成体にも、その起源には内戦や暴力的出来事があり、国民として一体化するにはそれを忘れることが必要なのだと。この小説でもそうした「忘却」が度々言及される(以下、傍点強調・引用者)。

その後数十年、台北人は沈黙の中で忘却を学んだ。大規模な逮捕の恐怖を忘却することを。(八五頁)

空気汚染と同じように至るところに存在する政治の、最も主要な目的とは

忘却をつくり出すこと。われわれをして自分たちが政治のなかに、汚染のなかに生きていることを忘れさせること。(二八二頁)

中華民国がかるうじて中華民国たりえ、台北人が台北人たりうるために、確かに「忘却」は必要であった。だからこそルナンがいうように、「歴史学の進歩は往々にして国民性にとって危険」になる。暴力的な出来事の記憶が掘り起こされ、加害者と被害者の間に古傷の痛みが瓦解しかねないからだ。その危険性については、胡淑雯自身、よくわかっていた。彼女は、「真相は人を苦しめる——そのとおり、真相は役立たずだ——だからみんなは逆に真相を暴いた人のことを責めて、加害者を追及することを忘れてしまうのだ」(三三四頁)と記している。「忘却」を掘り起こし、「真相」を暴くことは、新たな暴力となり、かつての加害者を苦しめる。文心が外祖父の「真相」を持ち出すことは、当然、加害者の

末裔・小海を傷つけるだろう。そのとき、文心は新たな加害者となる。

だが注意すべきは、文心から外祖父の話が聞かされるはるか以前から、小海はそれを知っていたということであり、むしろ、自らそれを求めたという点だ。一九八六年生まれの小海が高校三年生で、一八歳だったころ——それは、民進党が政権を握っていた時代だが——、「彼は世間を知るようになり、いくつかの事柄についても耳にしていたし、現代史——中華民国遷台史についても少しはわかるようになっていた」(二四〇頁)。同級生からは祖父を貶めるような言葉を投げつけられたりもしていたのである。つまり、小海の家族の歴史は、政権交代による本土化の過程で、「歴史学の進歩」によってすでに暴かれていたのだ。だが同時に、小海が自らその真相を求めた青年として描かれている点に着目したい。

小海は上手に身を処して自分の地位を守るということがわからない。世の不平等を憤り、世俗のひどさを憎む犬儒

主義に向かうか、あるいはポストモダンの無重力の逃避路線に向かうかである。彼は身の程知らずにも記憶を選択し、自分はその場に存在しなかつたが、父祖が黙認し、ひいては積極的に関与した暴行について探求した。「接収者と強奪者の後継者か……」小海がこんなふうに分身の境遇を追憶することは、肅清となら変わらない。台湾人になろうとすることは、簡単なことではないのだ。(二四二頁)

かつて、文心の外祖父の時代、「台湾人」として、中国人になろうとするとは、容易なことではなかった」(一九六頁)。だが、現在、それは外省人第三世代の小海の言葉に変わったのである。「台湾人になろうとすることは、簡単なことではないのだ」と。小海が一身の程知らずにも記憶を選択し、父祖が「積極的に関与した暴行について探求した」のは、おそらく「台湾人」になるためであった。だが、「接収者と強奪者の後継者」が自ら歴史を掘り起こし、過去

の負債に向き合おうとすれば、傷つくことは免れない。「自分の境遇を追憶することは、肅清となら変わらない」というひとは、小海が直面せざるを得ない残酷さを描いて余りあるが、そこに作者胡淑雯の「許し」とやさしさがあるような気がしてならない。

物語の最後に、小海はチェコに旅立ち、プラハから文心にシヨートメールを送ってくるが、そこには文心だけでなく、小海の新生も読み取れる。それは、お互いがそれぞれの家族の記憶に向き合い、それを共有し、両者を隔てる境界を乗り越えた結果でもあるだろう。

人と人は互いに近づき、寄りかからあい、互いに憐れみあい、愛しあうものだが、それも境界の崩壊をまず経験してからの話なのである。(四四二頁)

ここには、かつて境界線を引かれた二つの階級が、和解に至るプロセスが示されているように見える。その途上ではお互いに傷つけあうことも避けられないだろうし、元に戻ることもないだろ

う。だが、新しく生まれ変わることはできるのである。

わたしの四肢はいったん全部がばらばらになり、そしてあらためて組み立てられ、まったく新しい人間になるのだ。

さらに痛み、さらに歪んでしまっても、だからこそ知性と慈悲心とが少しばかり加えられるのである。(四四三頁)

これが、李文心が十日間の家出の間、様々な人々の記憶をかいくぐることによってたどり着いた最終地点であり、作者胡淑雯が書くことを通して見出した大いなるやさしさではないだろうか。

最後に、三須祐介氏の翻訳だが、ひじょうに自然で、時にこれが外国文学であることを忘れるほどであった。翻訳作品にありがちな「典型的な女性言葉」を極力避けたとのことだが、それが十分成功しているといえよう。